

## シベリア先住民の飲酒文化：アルコール飲料がつなぐ社会関係

---

### 背景と目的

ロシアでは、シベリアの先住民は概して暴飲に走る者が多いというイメージが流布している。北極圏周辺の諸民族はもともと飲酒の習慣も、アルコール性飲料の製造技術も持っておらず、酒類は近隣の民族から伝わったとされている。しかし、ソ連政府が先住民の伝統産業の育成よりも開発を優先し、さらに1990年代の経済的混乱により飲酒の弊害が悪化したとされおり [佐々木 2004: 219-220]、暴飲による暴力事件や、授乳期の女性や子供の飲酒習慣等が問題視されている。こうした状況に対して彼らの飲酒を社会問題として扱い、アンケート調査で飲酒率等を示す研究がなされているが [cf. Kharamzin, T. G. 2004: 156-157]、表面的な数値からのみでは飲酒の悪質なイメージを冗長させるばかりで、先住民がそれに至る社会経済的背景や文化的要素を捉えていないという問題を孕んでいる。

本研究の目的は、同時代の西シベリアの先住民の飲酒文化の実態を人類学的視点からフィールド調査し、そこから見える彼らの社会・文化的特徴を明らかにすることである。

### 方法

西シベリアにおいて2011年9月～2012年4月に参与観察とインタビューを主とした人類学的現地調査を行い、2013年11月～12月に研究所等において文献調査を行った。

### 調査地の民族誌的概況とその特徴

ヌムト湖の位置／自然／行政区／住民の民族構成／言語／ヌムト集落のインフラ

歴史的背景 (ソ連時代以前・ソ連時代・ソ連後の労働の変化)

住居の配置／周辺村・町との関係

複合的生業 (トナカイ飼育・漁撈・狩猟・採集)／現金収入のある労働

→**特徴1** ◎ 職業牧夫数名が計画経済に沿った食肉生産のために定められた場所で職業牧夫が専業で遊牧をしていた。しかし、社会主義体制が崩壊すると、国営農場での労働を辞め、森で世帯ごとに小規模のトナカイ飼育・漁撈・狩猟・採集を区別なく行う複合的生業を始めた。→戦略的再周辺化。

→**特徴2** ◎ 周辺村落・都市は遠く、現金収入のある労働に就く者は少数。

### 飲酒の実態

①飲用されているアルコール飲料の種類：

ウォッカ／スピリトゥス(spiritus)／ワイン・シャンパン・ビール／自家製酒((braga, camogon)／香水

②飲酒の場・作法：ロシア的なウォッカの飲み方＋独自の習慣

③飲む以外のアルコール飲料の活用：消毒／マッサージ／歯痛の麻酔

## その他の嗜好品とその周辺

- ①紅茶・タバコ／幻覚作用のあるキノコ／薬用茶。 伝統的にスパイスなし。
- ②白樺の皮等…嗜好品？香りを楽しむ
- ③トナカイの袋角・鞆丸・眼球…漢方薬として中国市場で販売

## 宗教活動とウォッカ

屠畜儀礼の供え物のひとつ／ボトルを開けた際の一杯目は竈の火に

## 飲酒から見える社会関係 ——アルコール飲料の入手——

- 事例① 自家製酒用の砂糖とイースト菌の入手
- 事例② 運び屋達の販売ルート
- 事例③ トナカイの贈与とウォッカ

## 考 察

- ◎ムムト社会において、アルコール飲料は簡単に手に入るものではなく、親族関係等を通じて入手する。核家族を基本とする世帯ごとに生業を行い、拡散的な居住形態をとり、強固な社会的組織がないこの社会では、モノ・トナカイ・労働の交換や贈与の際に親族関係・隣人関係がはっきりと立ちあらわれる。
- ◎宗教活動におけるウォッカの役割は神聖なものへの捧げものである。これは他地域と共通するものである。しかし、儀礼の場でウォッカが欠如しても問題ないとされており、宗教活動に必須というわけではない。
- ◎ロシア化と飲酒

## おわりに

実際に飲酒には暴力等の暗い側面もある。ロシアや世界的な政治経済の影響を受け、周辺の北方諸族社会は激しく変化してきた。そこには、将来への強い不安感や失意などの様々な感情・やるせない思いが生じている。筆者はこのような状況も彼らの暴飲に少なからず関わると考えている。それをいかに表現するかは今後の課題としたい。

## 参考文献

- Kharamzin, T. G. 2004 *Traditsionnoe Pripodopol'zovanie kak Osnova Razvitiia Material'noi kul'tury Obskikh Ugrov*. Moskva: IKAR.
- 佐々木史郎2004「シベリア、アムール川流域先住民の嗜好品：中国とロシアのあいだで」高田公理・栗田靖之・CDI（編）『嗜好品の文化人類学』講談社選書メチエ、pp. 217-225。